

## 看護学教育の精神に関する歴史学的研究：人物研究的アプローチを中心に

丸山, マサ美

<https://doi.org/10.15017/296>

---

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 28, pp.63-67, 2001-02. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン：

権利関係：

# 看護学教育の精神に関する歴史学的研究

—人物研究的アプローチを中心に—

丸 山 マサ美

## A Historical Approach to the Ethos of Education in Nursing

—A Biographical and Personality-analysis Approach—

Masami Maruyama

### Abstract

In this study, the ethos of contemporary education in nursing was evaluated by analyzing personal writings and narratives of Ms.T, who was engaged in nursing education under the close guidance of General Headquarters (GHQ) after the World War II, when the contemporary systems of nursing and nurses' work were established.

In the course of the study, the availability of personal writings and photographs has enabled the author to analyze the above theme in the wide framework of "individual and history".

As a matter of future interest concerning qualitative analysis in education and research on nursing, the formation of a conceptual framework should be focused on the dynamic process of reproduction of the life history in scenes of personal encounters through narratives as actions that constitute the reality (or linguistic interaction as their core).

Key Words: nursing-education, Individual vs History, GHQ, narrative, quantitative analysis,

### 緒 言

看護婦教育は、第二次世界大戦を境にして急速な変革を遂げた。今日的看護体制・勤務体制が確立したのは、第二次世界大戦後、GHQ(連合軍総司令部)の強力な指導の下でのことである。

本研究は、戦前戦後、看護婦として、また、管理者として、さらには、教育者として、看護教育に携った実践者T女史の手記および語りの観察記録から、今日の看護教育のエトスを考究するものである。

### 研究の目的と方法

看護学教育の精神(看護の kokoro)を追求するため、T女史の手記および語り(narrative)の観察記録から、歴史的事実を明らかにする。

### 考察・結果

#### 【T女史の経歴】

T女史は、昭和5年3月、F県立Y高等女学校を卒業後、翌4月、K帝国大学医学部附属病院看護員養成科入学。昭和7年卒業、看護婦免許取得。K帝国大学医学部附属病院に看護婦として就職。昭和10年10月副看護婦長となる。昭和12年6月、K帝国大学医学部附属病院を退職し、翌年10月まで、K電気軌道株式会社診療所に勤務。昭和13年10月、北京陸軍病院特設分院看護婦として勤務し、昭和16年10月、東京第二陸軍病院看護婦となる。北京陸軍病院特設分院骨傷北病棟の看護実践について、T女史は、戦火で倒れる兵士の姿に看護婦としての無力さを痛感し、看護に絶望したと語った(図1参照)。

昭和18年4月、香港陸軍病院に転属となり、同



図1 北京陸軍病院特設分院骨傷北病棟

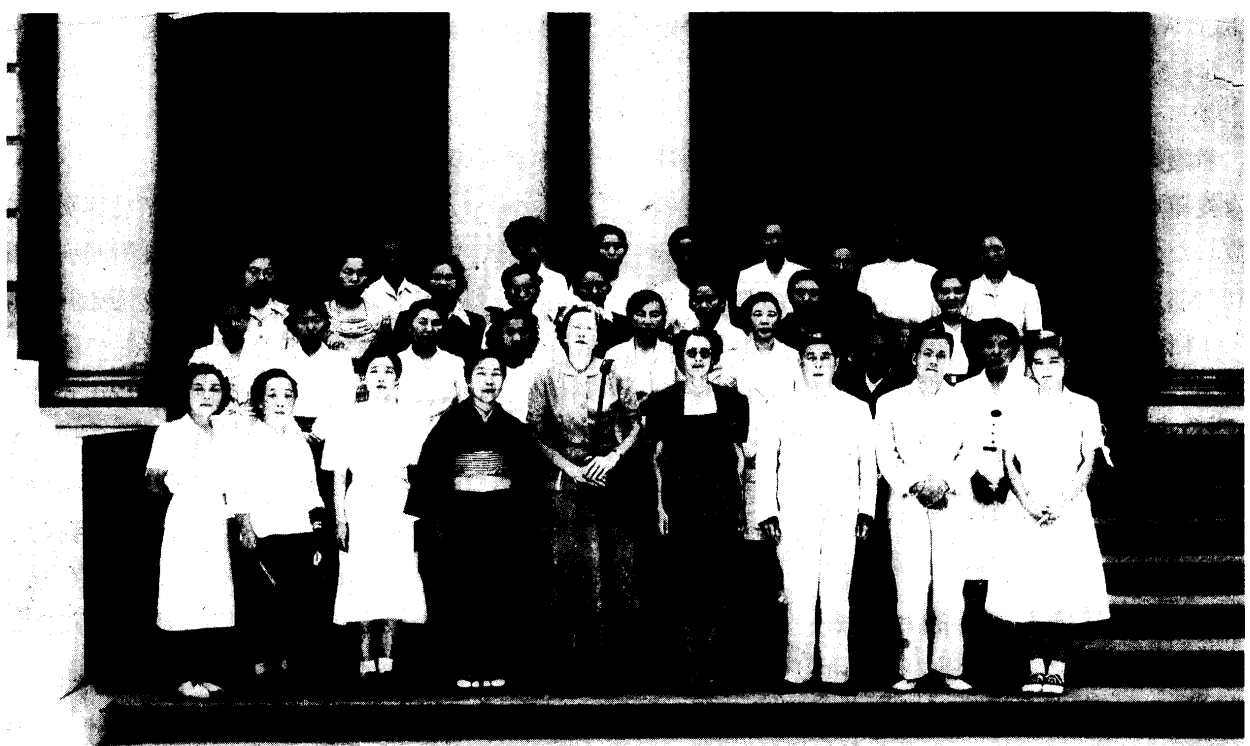


図2 K地区での活動

年6月、陸軍看護婦長として勤務。昭和21年5月、陸軍看護婦長を退官。

昭和22年8月、K帝国大学医学部附属医院看護婦長、ならびに、昭和23年4月、K女学部講師として、併任する。これまでの実践中心の役割から、理論を踏まえた教育者としての役割を担うことになる。

### 【GHQ看護課の指導者との出会い】

昭和23年、T女史は、A教官とともに、東京日赤において開催された第1回専任教員講習会に、参加した。この時の思い出をT女史は、手記に残しているが、そのほとんどが、アメリカ民生部・生理学者 Billie Harter（以下ハーター女史と略す）の講義についてである。

講習会「再教育 (Refresher Courses) プログラム」の目的は、新しい看護の哲学を教えること、患者中心の看護を教えること、患者のための安全なケアを引き受けるために看護婦に求められる科学的な基礎知識等である。

特に、ハーター女史は、講習会の対象者が、T女史のような看護学校の教育者や、病院の総婦長、婦長であった理由について、ライダー島崎宛の手紙に、「私達は、若い学生に対して、基礎的看護のプログラムで新しい考えと原理を熱心に教えた。しかし、現在の病院の状況を改善するには、彼女達がリーダーシップをとって、権威をもった地位で働くようになるまでには、あまりに時間がかかりすぎる。そこで、同様な教育を受けた年配の看護婦が、理念と、そして、最も大切なことは、新しい考え方を実行しようとする意気込みをもって、日本中の病院に帰ることが必要でした」と、書いている。

T女史は、多くの看護の教育者、あるいは、看護学生に、ハーター女史の印象や、感動の講義場面を語っているが、とりわけ、ハーター女史が、受講生の一人一人にチョコレートを渡し、すぐにそのチョコレートを口に含むように指示され、今食べたチョコレートの代謝について説明するように問われた場面が繰返された。折しも、昭和23年、戦後混乱の最中の講習会である。T女史にとって、甘いチョコレートの味覚と、ハーター女史の鮮や

かな講義場面とは、晩年の病床の記憶にも消えることがなかった。

ライダー島崎は、同じ指導者講習会に出席した北海道大学医学部附属病院厚生女学部の山崎かつえ女史も、ハーター女史のダイナミックな教授法と人となりにより感銘を受け、専門職者としての自覚を得たことを報告している。「教育内容は素晴らしい企画、高度の指導力、魅力ある人柄、講義の内容はわかりやすく、病院の実態をよく把握され病棟管理を教えられるのでよく理解でき、敗戦後の荒れた病棟を臉に浮かべながら、帰ったらあれもなければこれもしなければと思いながら指導を受けた」<sup>2)</sup>。

### 【講義ノート】

ハーター女史の講義は、1日3時間、基礎看護法と病室管理、看護実習、解剖生理、小児科看護法、看護教育の原理が行われた。同じ講習会（昭和23年5月4日～7月28日）を受講していた吉田浪子女史の講義ノートは、詳細にその内容を筆記している。そのインクは、垣根の木の青い実を採ってきて、すり潰した汁を代わりにしたとある<sup>3)</sup>。

講習会開始8日目の講義時間、受講生は、ハーター女史に「看護婦は白粉に口紅をつけてよいか」等、質問している。ハーター女史は、1. 病人より悪い顔色していることもある。これは不可。2. 健康に見える程度にするならば可。3. 患者も自分より顔色の悪い看護婦に看護してもらうことは喜ばない。4. ピチピチした健康明朗な看護婦は、患者に好影響を与えると、4項目を解答している。また、入院時の注意として、性別、年齢、国民性のみならず、宗教、とりわけ、心と精神の同一化、さらには、患者の経験したことを看護婦が知ること、また、看護婦は、医師の診断名を知っておかなければならない、看護婦は、医師の命令と看護婦の処置を知らねばならない、看護婦は、患者の状態を知らねばならない等、14項目を提示している。

### 【理論と実践の統合】

戦後の看護改革の基本は、理論と実践の統合に置かれた。

K大学においては、理論の拠点となるK大学の

看護学校が、昭和23（1948）年を目標に新制度のプログラムを申請したことから、K地区の係であるジョセフィン・バーカーと、当時、F県の県庁の看護係長であった中村スエは、実践の中心であるK病院の視察を繰り返し、看護教育の向上のためには、医療の場そのものの改善も必要だということを示した（図2参照）。

K大学の看護学校は、GHQが指導している看護教育審議会の推薦する新カリキュラムを採用し、昭和25（1950）年、甲種の看護学校として認可され、K附属看護学校の看護教育は、創立20年目の昭和43年には、軌道に乗った。

T女史は、昭和46年4月、K大学医学部附属看護学校講師から、K大学医療技術短期大学部助教授に就任。昭和52年4月、教授職を経て定年となる。さらに、同年、S大学医療技術短期大学設立のため、創設準備室に教授要員となり、また、昭和54年4月、G短期大学教授要員として、G短期大学看護学科開設準備室に勤務する。T女史は、新制度の看護学校教育の改革期を自ら体験し、通算25年の歳月、看護教育に従事した。

占領軍による日本の看護改革の評価は、さまざまである。<sup>4)</sup>しかし、日本の看護婦が、高度の教育を受けることができる基盤を作ったのは、占領軍の功績である<sup>5)</sup>。

T女史は、K大学の印象が、一番深いことも、語っているが、T女史の受けた当時のK大学看護学校の教育の理念は、学問、思想において朱子学、陽明学、古学三派の儒教を中心に置く、「医は仁術、人類愛に徹せよ」であった。T女史は、人格を磨くことの尊さを説く明治期からの看護婦養成の教育の精神(kokoro)に、共感していたものと思われる。

残念ながら、彼女の生涯における教育思想・教育実践について、正確で詳細な多くの研究物は残されていない。

しかし、T女史の看護学教育における精神(kokoro)は、多くの語りを通じて、S大学看護学科、ならびに、G大学看護学科の創設準備室において、看護学教育における精神(kokoro)が、よどみなく受け継がれていったのではないだろうか。

また、人格を磨く尊さは、倫理観形成段階にある今日の看護学生にも、臨地教育を通して育まれている<sup>6)</sup>。

## 結 語

看護教育および看護研究における質的ないし、定性的分析への関心から、T女史の25年の実践の歴史を通して、看護学教育の精神を模索した。残された個人の手記や写真を素材に「個人と歴史」の関わりといったマクロな看護場面の分析枠組の形成を目指した。さらには、現実を構成する営み、あるいは、その実質をなす言語的相互行為である語り(narrative)を通じて、対面における生活史再現の過程に、概念枠組の形成を焦点化した。

また、個人の人生の歴史的な事件の記述・解釈のみならず、「個人と歴史」の問題は、個人資料の普遍性と歴史を読む洗練された方法論が必要となる。

生活行為は、その根底で、エトスに規定される。エトスは、人間の態度と行為を特定の方向へ内発的に動機づける。エトスもまた、時代の産物である。従って、エトスは、同時代の人々の「生き方」を捉える時代精神となる。

## 【付記】

T女史に関する個人資料は、生前、御本人より、お預りしたものである。謹んで深く哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈りしたい。

また、本稿は、平成10年8月に北九州国際会議場において開催された第8回日本看護学教育学会・学術集会の発表原稿に加筆・修正したものである。

## 【謝辞】

本研究遂行にあたり、日本赤十字秋田短期大学教授山本捷子先生を始め、日本看護歴史学会事務局の先生方に、御支援をいただきました。深謝申しあげます。

## 引用文献

- 1) 山本捷子：第二次世界大戦後のわが国の看護改革の一側面—法律制定に伴って行われた実務者の補習教育と再教育について—。Reiko

- Shimasaki Ryder 「NURSING REORGANIZATION IN OCCUPIED JAPAN, 1945-1952」 p.108. 日本赤十字看護大学紀要 No.4, p.56. 1990.
- 2) ライダー島崎玲子：被占領下における看護政策の遂行。山崎かつえ「ライダー島崎玲子への書簡（1982年3月3日付）」。検証一戦後看護の50年。日本看護歴史学会編。メジカルフレンド社。50頁，1998年。
- 3) 山本捷子：吉田浪子の歩みと素顔。pp.92-93. 1995. ジェイシーエス出版。
- 4) 亀山美知子：看護婦の社会的地位について—戦後50年を評価する—。看護 Vol.47, No.15, pp.88-95. 1995. 12.
- 5) ライダー島崎玲子：連合軍司令部と看護改革。看護 Vol.47, No.15, pp.45-51. 1995. 12.
- 6) 丸山マサ美：臨地実習における看護倫理教育，生命倫理 Vol.9, No.1, pp.141-145. 1999. 9.

### 参考文献

- 1) 古屋野正伍, 青木秀男：日記分析における「個人対歴史」の問題—金沢・象嵌細工職人の生活史研究のばあい—。人間科学論究, 第3号。pp. 65-76. 1995. 2.
- 2) 中野卓「個人史の社会学的研究について (1)」『社会学評論』32巻1号, 5頁, 1981.
- 3) 北澤毅・古賀正義：〈社会〉を読み解く技法, 質的調査法への招待。福村出版。1997.
- 4) ライダー島崎玲子：戦後看護界出来事誌—4 GHQによる日本の看護改革。看護36巻12号, 1984.
- 5) ライダー島崎玲子：アメリカ看護の変遷と現状—特に戦後日本への影響。日本看護科学学会誌, 3巻1号, 1983.
- 6) 日本看護歴史学会誌／戦後五十年記念特集号第九号。日本看護歴史学会。1996. 3.